

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第125号

令和3年3月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

二頭政治から観応の擾乱、そして鎮魂と供養へ 室町政権の基礎を築いた直義の生涯

— 正行の会、初めての試み「講談 足利直義」 —

● 教文HPに脚本全文アップ ●

2月例会のテーマは、足利直義です。

足利直義の生涯を大きく分けると、「建武新政期」～兄、尊氏を支え、鎌倉の地で幕府政治の基礎固め、「二頭政治期」～天下執権人として室町幕府の政務を取り仕切る、「観応擾乱期」～師直との対立に端を発し、兄尊氏、その嫡子義詮との確執・対立劇、「鎌倉で死去」～「鎌倉」的時代の終焉、「鎮魂と供養」～死後6年にして贈従二位・贈正二位、その4年後、勸請奉大蔵宮～神格化、と区切ることができます。

そして、この日、初めての試みとして、「講談～足利直義」を演じました。

リポートスタイルを、講義調から講談調に代えて、リラックスしながら気楽に聞いてもらおうとの趣旨です。

約1時間演じました中から、一部抜粋してご紹介しましょう。原作は、森茂暁著「足利直義」角川選書です。なお、脚本の全文は、四條畷市立教育文化センターホームページ<http://nawate-kyobun.jp/>のトップページ>イベント情報>四條畷楠正行の会>過去の例会>第68回例会、に掲載していますので、ご覧ください。

— 序章 直義プロフィール

戦国時代、歴代将軍・執事などの経歴を記録した「公武補任次第」がございまして、その書に「大樹の御代として、御下知をなされ畢んぬ。」と記され、将軍尊氏に代わって下知をなしたという、室町幕府政治を強力にけん引した人物がいました。

何を隠そう、この人物こそ、本日の主人公「足利直義」その人です。

足利氏は、北関東を流れる利根川水系の支流、渡良瀬川を境界として、上野国と接する下野国は足利荘、現在の栃木県を根拠地とし、義康を祖とする一族で、代々北条氏一門から妻を迎えてきました。直義は、兄、尊氏と2歳違いの弟で、父、貞氏、母、上杉清子と同じくする同母兄弟であります。この二人の兄弟が、やがて骨肉の争いを展開しようとは、誰も予測できなかったのであります。

その人物像を申し上げれば、兄、尊氏は、包容力があり、清濁併せ呑むといった敵・味方に対して寛大な底抜けに明るい性格と云えます。対して、弟、直義は、几帳面で誠実、尊氏とは対照的に、理非曲直をきちんと正し、道理に基づいて行動するタイプでありました。が故に、直義の性格を見抜いていた尊氏は、直義を政務につかせ、武家・公家を合わせた政治の舞台に臨ませたのであります。

そして、尊氏の期待通り、直義は、兄、尊氏とともに縦横無尽の活躍で幕府の政治を切り盛りし、鎌倉幕府に次ぐ、第二の武家政権たる室町幕府、尊氏と直義の「二頭政治」の基礎を築いた人物であります。

しかし、理想に燃えて、平和国家の樹立を目指す直義に立ちほだかりましたのが、武家の急進派急先鋒であった高師直・師泰の兄弟でありました。直義は、世に観応の擾乱と呼ばれる熾烈な対立・抗争を繰り返しますが、その最後は、京の都を脱出し、北国を経て、鎌倉への退去を余儀なくされたのであります。

直義は、観応3年1352、2月26日、享年46歳、非業の死を遂げた人物であります。

しかし、直義暗殺の代償は実に大きかったのであります。直義の怨霊は、その後の室町幕府の行く手に暗い影

を落とし、幕府運営を極めて不安定にしました。

鎮魂の動きは直ちに始まり、直義没後6年にして「従二位」が贈られ、次いで、時を置くことなく「正二位」までもが、矢継ぎ早に贈られました。また、その4年後には「大倉の宮」として神格化されるのであります。天竜寺の傍らに「大倉の宮」を祀る寺まで作られています。

直義怨霊の祟りは相当に強かったのでしょうか。足利2代將軍義詮や3代將軍義満、そして6代將軍義教までもが、直義の年忌法要をせつせと務めたのであります。

足利政権の誕生に、尊氏を支えて歴史舞台上に登場した直義でありましたが、將軍にとって代わろうとする野望と、観応の擾乱に敗れた失意が故にもたらした怨霊、その根強さが計り知れなかったことを暗示させる、鎮魂であったといえます。

そして、追憶の中の直義は、室町將軍らの評伝を記した「満濟准后日記」に、その名が全く登場しません。室町幕府は、宗門を隆盛に導いた恩義ある巨人の一人、直義が背負う歴史を「不吉」なものとして封印したに相違ありません。

直義という人物の、特異な立ち位置が、ここから見えてきます。では、お待ちかね、直義の登場でございます。

一 直義登場！

頼朝の命により義兼が北条時政の娘を娶ったことに始まり、尊氏まで七代続きで北条一門から正室を迎え北条氏よりの厚遇によって、足利氏の地位は安定はしていたものの、鎌倉幕府が得宗専制体制への傾斜を強めたことでその地位は低下し、鎌倉末期に閉塞状態にあった足利氏が、起死回生のチャンスをうかがっていたことは想像に難くはありません。

元弘の乱の最終局面で、尊氏が、幕府側から後醍醐・倒幕側に寝返ったのは、決して突発的な行動ではなく、北条氏に対する雌伏の時代を考えれば、当然でさえあったのです。

尊氏の祖父、家時は、「三代の後、即ち尊氏時代に、天下を取る」という悲願をかけて、自刃したと伝わるのも、その由縁であります。

北条高時に六波羅探題救援のため京に迎えとの命を受けますが、父、貞氏臨終まじかで辞退する尊氏でしたが、高時の執拗な叱咤を受け、しぶしぶ兵を進めた尊氏は、足利氏の飛び領、丹波国篠村に兵をとどめました。

「ここ篠村八幡宮は足利家の崇める神ぞ。」がんもんと願い文を捧げたのです。この時、尊氏が奉じた願文は、今も篠村八幡宮に伝わっております。

「敬白、立願の事。今や、後醍醐天皇の勅を奉じ、民のため、世のため義兵を挙げた。」と、鏑矢一筋をとって

願文を神殿にささげ、後醍醐側に建つことを鮮明にして、六波羅に向かったのであります。

その倒幕思考に火をつけ、篠村で取って返し、元弘の乱で軍事指揮をとったのは、すべて、兄、尊氏でありました。この時はまだ、直義は兄の影のような存在でしかなかったのであります。

後醍醐の建武政権が誕生しますと、恩賞の筆頭、尊氏には武蔵・常陸・下野の三か国が与えられ、一方、直義には遠江国が与えられ、直義は、成良親王を奉じて、鎌倉將軍府執権として関東・鎌倉に下向し、その頭角を現すことになるのであります。

この時、直義は、従四位下、左馬頭・相模守となつて、鎌倉に参りますが、これは、後醍醐の皇子を奉じた地方統治の第二弾でありまして、この二ヶ月前には、義良親王を奉じ、北畠親房・顕家が陸奥国に赴いていたのであります。

そして、直義は、後醍醐の思いとは裏腹に、建武政権内に幕府再生の目論見を、鎌倉の地で宮々と築いていくこととなります。直義、鎌倉時代に、鎌倉執権として発給した文書や下知状、寄進状を見ると、さながら鎌倉幕府の再現ともいえる様相が見えてきます。

また、鎌倉には、幕府滅亡後、尊氏の嫡子千寿王、後の義詮であります。家臣とともに支配の基盤を築いておりましたので、直義の鎌倉將軍府はその上に乗っかる形となり、いわば後に誕生する足利政権の原型になったとお思い下さい。

後醍醐にすれば、地方の出先機関に過ぎなかった鎌倉將軍府でありましたが、直義から見れば、鎌倉將軍府は武家勢力結集の核であり、第二の武家政権樹立の胎動、萌芽が、ここから始まっていたのであります。そして、この背景には、関東武士たちの建武政権への不平・不満、更には天皇親政・公家政治を目指す建武政権とは真逆の、武家政権への回帰志向のあったことは見逃せません。

武家政権回帰への動きを加速させたのが、建武2年1335に勃発した北条残党、高時の遺児、時行の起こした中先代の乱でありました。

迎え撃った直義でありましたが、敗戦を重ね、終に鎌倉を去り、成良親王、尊氏嫡子義詮とともに逃れて、矢作の宿に留まることとなりました。そして、尊氏の援軍出動によって、時行は鎌倉を撤退することになり、この中先代の乱の結末の出来事は、結果として、尊氏を鎌倉に呼び寄せ、京の後醍醐に対する鎌倉の尊氏との構図を明らかにさせ、南北朝時代の確執と抗争を演出する、大きな転換点になったといえます。

…この後、二頭政治、観応の擾乱、鎮魂と供養へと続きますが、それはまたのお楽しみ！

(文責『四條瞬楠正行の会』代表 扇谷昭)